

民俗博物館だより

Vol.45 No.1

2020. 3. 19



杉皮の採取 皮むき (写真提供：谷上社寺工業株式会社)

木の輪郭に沿って規定の長さに切れ目を入れ、ヘラを差し込んで丁寧に皮を剥いていきます。夏の土用の間が適期です。昭和 30 年代には、吉野地域一帯で杉皮屋根の民家をみることができました。

大和民俗公園内の県指定有形文化財旧前坊家住宅（旧所在地：吉野町吉野山）では、貴重な文化財を保存・継承するため、令和元年度から屋根の葺き替え工事が行われています。

目 次

資料紹介 大和機	—大和の傾斜型高機—	・・・・・・・・・・	1
事業報告	秋季特別展と博物館インターンシップ	・・・・・・・・・・	4
展示紹介	シリーズ展「昔のくらしのサイエンス」	・・・・・・・・・・	6
みんなく春夏秋冬	令和元年度の活動記録	・・・・・・・・・・	7

〈資料紹介〉

大和機—大和の傾斜型高機—

横山浩子

1. はじめに

織り手の側を低く、前方の脚を長くし、織前から間丁（大和では肩という）に向かって上向きに桁が突き出す独特なフォルムをもつ傾斜型高機は、数ある奈良県の有形民俗資料の中でも、間違いなく代表的なものの一つといえる。日本の手織高機の一原型とも位置づけられ、今、研究者の間で「大和機」と通称されている。

2. 名称について

「大和機」と称されるようになった経緯は、今ひとつわからない。井原西鶴の元禄元年(1688)刊『日本永代蔵』巻5「豆一粒の光り堂」冒頭の「女は麻布を織り延、足引の大和機を立」が初出といわれるが、他にあまり用例をみない。「足引」は、山（大和）をひき出す枕言葉で機の形態を示す実質的な意味はもたないとしても、「大和機」は、果たしてこのタイプの機の呼称として一般的だったのだろうか。当館が所蔵する資料は聴取に基づき「ハタ」、「ハタゴ」、また「モメンバタ（木綿機）」等の名称で資料台帳に登録されている。筆者も調査等で今まで大和機という言葉は聞いたことがない。

江戸時代中期、村井古堂(1681～1748)が著した『奈良曝布古今俚諺集』（延享5年＝1748、以下『俚諺集』と略記）は、当時の奈良晒の来歴、生産体制、技術等をうかがうことのできる貴重な文献である。南都布を織る機を「上機」と記し、略図も含めてその形状を具体的に示しているの、傾斜型高機＝上機と確定できる。文言上は、同著者による正徳3年(1713)の『南都名産文集』「布機」の項に既に「この里の上機」とある。

その前年刊行の寺島良安編『和漢三才図会』巻36「女工具」木綿機の項に、「有上機下機之二品而上機和州多用織麻布及紬・・・」とある「上機」もまた、南都の布

機を指すと思われる。しかし「上機」という語もまた呼称としては定着していない。思えば地域一帯そのタイプの機しか存在せず、日常用いているものを地元の人が「大和機」「上機」と呼ぶ必要はないのだろう。

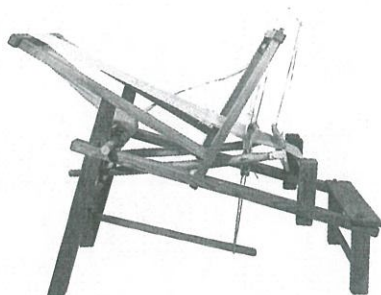
他地域での呼称に起因するとすれば、この機の伝播に関する手掛かりともなる有益な情報である。しかし、新潟県などで同じ系譜上にあるとはいえない機を「大和機」と称する事例もあり、筆者自身未だ整理しきれていない。

このような民俗資料としての呼称の問題は認識しつつ、ひとまずは、日本の高機の一形式として学術的に一定の定着をみている「大和機」という呼称を用いる。

3. 腰機と高機

日本の手織機は、大要としては腰機から高機への移行として把握される。経糸の張り加減を織り手の身体と直接連動させる腰機に対し、高機はそれを機構的に固定する仕掛けを備える。高機への転換によって、経糸の張力調整から作業者の身体を自由にし、併せて腰掛け位置が高く、踏木を使用することにより作業姿勢が改善されること、箴は打込み具、杼は緯通し具に機能分化し、重複動作が省かれるなど、作業効率、労働生産性を向上させることができる。また、半綜統・中筒仕掛けの片口（上口）開口方式の腰機は基本的に平織専用であるのに対して、綜統を複数仕掛けられる両口開口方式の高機は、より複雑な織物組織の製織を可能にする。このような点から性能高度な手織機は高機で、腰機は旧式で劣っているものとし、その推移を短絡的に「機能の進化・発展」としてのみ捉えがちである。しかし、手織機の実態調査に基づく先駆的研究で知られる角山幸洋氏は、高機と腰機は元来別系統に属し、高機は絹の製織を前提とするものとした上で、我が国における両者の歴史的展開の重層性（高機と腰機が共存しつつ同時発展したこと）、複合性（腰機と絹用高機の構造が複合し成立した機台の存在）を指摘し、その移行過程において繊維の性質や地域における需要など様々な動機から多種多様な機を生み出した実態を明かにしている。また、佐貫尹・美奈子両氏も近世から近代移行期に地方の紬、麻、木綿など平織専用の高機が天秤腰機の機能特性を積極的に取り入れながら進化した事例を紹介している。

さらに近年、特に注目されているのが植村和代氏の研



大和の傾斜型高機（大和機）

究である。天秤腰機の機能特性に着目し、傾斜高機（大和機）、水平高機をあわせて比較、手織機の機能的特性と地合、風合いとの関連性からその再評価を試みたものである。機能を経済的観点のみから単純化してはかることに対する従来の考え方に再検討を迫るとともに、新たな手織機像を提示している。

4. 大和機の来歴

さて、上掲各氏が「地機と絹用高機の構造の一部をとりいれて成立した機台」（角山）、「地機（天秤腰機）の機能特性を有する高機」（植村・佐貫）として特に取り上げているのが大和機である。傾斜機台以外の形式上の特色は、ロクロ仕掛け、原則2枚の番目綜統で構成され、踏木の支点が前方（間丁側）にあることなどである。奈良県全域に普及する一方、部分的改良を伴いつつ、同系統の機が東は三重・愛知・静岡、西は兵庫、岡山、鳥取等諸県に分布することが報告されている。

『俚諺集』は「慶長年中より縷平布盛んになりし故、機細工巧業の家職出来て、三四字今に至りて所所に居住す」とし、奈良晒用の生布（南都布）を織る機として導入され、その時期を17世紀前半とする。また、既述の『和漢三才図会』により18世紀初期には麻織用の機として一定の普及をみて、京・大坂など周辺地域からもそれが広く認知されていたことがわかる。但し、木綿は常に下機で織るとするところから、大和でもこの頃は未だ木綿織りの機は天秤腰機であったと推測される。

麻織物では、越後縮をはじめ、京都に隣接する近江地方でも近代に至るまで長く腰機が使用されたし、また木綿織り産地の高機導入期も多くは19世紀以降とされるのに比べるとおよそ2世紀早い。奈良晒の生産技術は、海外の先進技術に触発されて発達した京都や堺の織物業と同じ枠組みで捉える必要がある。

『俚諺集』は「絹布の高機を模して造り」とするものの、その来歴を具体的に知る手掛かりはない。文政9年（1826）刊、大関増業の『機織彙編』5巻に「別製絹機」として大和機と同型の機の図が掲載されている。残念ながら南都布機が導入された時期より後の記録であり、使用地や使用の詳細は不明で、南都の機が模した絹布の高機そのものとは断定できない。

植村氏は、機構上の特色から西アジア由来とし、16～17世紀初頃の日本の海外交易等の動向などを併せ論じている。興味深い指摘であるが、完形品として海外から輸入されたと仮定すると、現時点では同定でき

る機がなく立証は難しい。「西日本型」といわれる傾斜機台の天秤腰機との近親性から、国内で、傾斜機台にロクロ仕掛けの番綜統や、経糸固定構造を移入して高機として改良した可能性もある。

また佐貫氏は、京都の五条坊門通菅大臣神社附近で織られていた木綿嶋（棧留など輸入木綿織物の模織）に用いられていた小型の高機に比定する。

高機の導入は、奈良晒の急速な需要の伸びに対応し、作業の効率化を図るためと思われる。生産最盛期にあたる18世紀初頃でも、織布の分布は奈良の町を中心に添上・添下郡及び南山城など比較的狭い範囲に集中していた。年間30～40万疋もの生産量が達成できたのは、高機の導入と不可分であろう。当時の機数について、貞享2年（1685）の機数の記録があり、7,762脚と伝える。

一般に、高機の作業効率、労働生産性は天秤腰機の3倍ともいわれる。しかしそれは、長繊維で強靱、精練によってさらに柔軟性を増す絹糸の場合である。繊維を撚り繫いで糸とし、弾性、伸縮性に乏しい苧麻糸は、経糸張力の自在な調整が難しい高機ではトラブルを誘発し、却って作業効率が低下する懸念がある。しかし、植村氏が実験の結果明かにした大和機の特性は、開口時に上糸と下糸の経糸張力が異なることによって水平高機とは異なり、経糸張力の微調整機能を発揮するというものであった。経糸を緩く張り、綾の位置、綜統や箆框の位置などのバランスが働くこととそれらが連動し、交差して張力が交代する時に、緩くなる経糸が左右に動き、等間隔に離れるという天秤腰機と近似する特徴を持つという。また特に、当館には他の機に比して鳥居木から間丁までの桁丈が15～20cm長い機があり、麻織用の機の形態が残存しているものと想定している。経糸にかかる力の緩和機能の一端と思われる。

5. 越後布の腰機と大和機

近世を代表する商品用苧麻織物といえば、越後布を挙げねばならない。原料は、奈良晒と同じ羽州、また会津など東北産青苧を用いる。経緯撚糸、特に緯糸に強い撚りをかけることによって独特の地合、風合いをもつ縮布や精緻な嶋（縞）・緋で知られる。「箔布」と称する一反二両以上もする緯糸に強撚糸を用いない最上級白布もあるが、生産地域は限られ、希少なもののようである。

越後の機は、機台が水平垂直を基本とする東北日本型、但し前の膝から織前までが非常に近くかなり小ぶ



越後縮の機 (澤田絹子氏所蔵)

りな天秤腰機である。ごく背のひくい中筒、抒口は最小限しか開かないが、絶妙な作りの大抒がすりと入る。この機が今日まで使用されてきたのは、極細の撚糸を使用し、一見してそれとわかる美しく個性的な布を織るのには、最も適した機だったからである。明治36年に刊行された『北越機業史』では、高機移行が全国的な流れとなる中で天秤腰機を使用する理由について、「此の機具を用ふる所以は、縷の強き糸を、長機具に掛くれば、其の間に於て、伸縮を生じて、糸の張力不同なるが故なり」との見解を載せている。

因みに、奈良晒の発展は平布（経糸は無撚か弱撚、緯糸は無撚の布）の生産と軌を一にする。「縷布」は漸次衰退し、『毛吹草』（松江重頼 正保2年=1645）が大和の産物に挙げた「縮布」も、18世紀前半の『呉服類名物目録』（享保18年=1734 国立国会図書館蔵）では「難しきもの」とされている。

モジリ（綜統）から間丁までの経糸の間が長く、経糸に緩みのある大和機では、撚りの強い経糸はその間で伸縮を生じて全体として張力を均一に保つのが難しく、糸同士の縲れ、纏れを誘う原因ともなる。大和機は万能ではない。平布の製織に向く機であって、縷布や縮布に苦戦した一因は織機にあったのではないだろうか。

6. 奈良県内における木綿用の大和機

まず、苧麻布の織機として導入された大和機は、その後（恐らく18世紀後半以降）「木綿機」として奈良盆地とその周辺部に普及し、1970年代、大和緋（木綿）の生産が終焉を迎えるまで、都合350年にわたって受け継がれた。県内に遺る大和機は、どれも基本的な形がよく踏襲されバリエーションは少ないが、木綿機としての適応に起因すると思われる変化がみられる。

まず間丁までの桁の長さが短くなる。また、前脚がさらに長くなる傾向がみえ、特に明治以降の機では、「五寸高」と称する、機台が急傾斜する機に変化する。五寸高は全て大和緋の製織に用いられた機である。これは従来、緋織り



「五寸高」の木綿機 (梅本美枝氏提供)

の専用機として、柄のずれをいち早く発見し、対処するための工夫とされてきたが、大和緋で用いられたものと同様の20番手の紡績糸（単糸）をかけて試織した結果から、抒口がより広く開く特性も見逃せない。

また、経糸はかなり張った状態だったようである。麻に比べ伸度が高く、張力に対する耐性のある紡績糸だからこそ可能といえるが、張力をかけると箄の打ち込みが安定し、強く打ち込むことができる。さらに緋を織ることを前提にすると、麻糸のときのように張力を緩めれば、経糸が張力の交代時に大きく動くので、柄にずれが生じやすくなる。一口に大和機といっても、かける糸や織り手、また時代が求める製品によって使い方、各部の調整は一様ではないのである。

7. 小結—織機の近代化—

大和機は、フレキシブルな機である。しかし、それは織り手の技量が強く反映するという点でもある。安定して誰でもが扱えることを道具に求める価値観からすれば、人が介在する余地の大きい未完成な機に映るだろう。

各地の伝統的手織機は、素材となる糸、織り手の技術と相まって地域独自の個性豊かな布を生み出してきた。しかし、紡績糸の登場によって次第にその役割を失い、誰でもが効率よく一定水準の製品を作ることを志向するようになっていった。大和緋を除く奈良盆地の木綿織りでは、バタ装置のついた水平型の高機が急速に普及、以前の2倍以上の早さで織ることが可能になった。

また麻織物の場合も、大正期以降に大和機を緩傾斜にしてバタ装置の箄吊枠（但し投枠）を取り付けるなど、改造を施されたものが使用されるようになる。

【参考文献】

- ・角山幸洋「日本の織機」（『服装文化』No.148 1975）、「手織機（地機）の調査研究」（『関西大学東西学術研究所紀要』第27輯 1994年）、「手織機（高機）の調査研究」（『関西大学東西学術研究所紀要』第28輯 1995年）、ほか
- ・佐貫尹・佐貫美奈子『高機物語—日本の手織り高機—』芸艸堂 2002年
- ・植村和代『ものと人間の文化史 169 織物』法政大学出版会 2014年
- ・『新潟県史 通史編 5』新潟県 1988年
- ・藤田祥光筆写本『奈良左良志・蚊帳・襖地』（奈良県立図書館蔵）
- ・安藤鑑、内田慶三『北越機業史』目録書房 1903年

〈事業報告〉

秋季特別展と博物館インターンシップ

茶谷まりえ

1. はじめに

今年度、私は自身にとって初めての特別展を担当しました。そのきっかけになったのは、永井清繁さん(1905-1999)が明治末期から昭和初期の暮らしを描いたスケッチと、帝塚山大学文学部の高田照世教授とのご縁でした。

永井さんは天理市福住に生まれ、長年呉服屋を営んで来られました。画家でもなく、特別に絵の勉強をしたというわけでもなく、70代になってから「子どもや孫に昔の暮らしを伝えたい」という想いから当時の村の様子とそこに暮らす様々な人の姿をスケッチとして残し始められたそうですが、精緻でありながらも温もりのある絵の数々は、見る人の心を一瞬で惹きつけます。高田先生の研究室では、研究室に永井さんの曾孫にあたる学生が在籍していたことをきっかけにスケッチと出逢い、その後、地元での聞き取り調査や展示、ワークショップなどに取り組んで来られました。一連の活動を経て、2019年3月末には書籍『奈良山里の生活図誌』(帝塚山大学出版会)が刊行され、永井さんの作品はより広く知られるところとなりました。私もまた、絵の美しさに心を奪われた一人でしたが、それ以上に、そこにたくさんの生活用品が登場することに驚かされました。しかも、民俗博物館の収蔵庫にある資料とそっくりなものばかりだったのです。高田先生にそのことをお話ししたところ、「永井さんの作品と民俗博物館の収蔵資料が組み合わせたら、すごく面白い展示になるのではないだろうか?」という構想が生まれ、実現に向かっていきました。このように、特別展「絵と道具でたどる昔の奈良の暮らし—永井清繁氏のスケッチ帖から—」は縁と縁がつながってスタートしました。

2. 博物館インターンシップ

秋の特別展の開催に先駆け、準備段階の8月末から約3ヶ月にわたって帝塚山大学の学生を「博物館インターンシップ」として受け入れることになりました。同大学大学院の推薦を受けた清水智子さんは博物館にとって欠かせない存在になっていくことになるのです

が、活動日が直前に迫った頃、私はまだ週2回のカリキュラムの組み立てに悩んでいました。自分自身、大きな展示を担当するのも初めてで、永井さんの絵についてもまだよく知らないことが多く、展示構想もまだはっきりしていなかったからです。しかし、高田先生の研究室の学生であり、福住でのフィールドワーク経験が豊富な清水さんと展示についての意見交換をする中で、地域の方々から直接教わった昔の暮らしや道具の使い方に関する話は生き生きとした魅力と説得力がありました。その時、ようやくこの展示の意義や目指すものがはっきりと見えてきたような気がしました。

そこで、展示資料の選定から解説パネルのデザイン、展示資材の配置、資料のレイアウト、ライティングに至るまで、清水さんと一緒に展示を組み立てていくことにしました。また、一連の作業の中で、会期中に来館する団体見学の小学生が読めるようにタイトル・解説文の全てにふりがなを打つことや、清水さんの言葉で解説するパネルを作ろうといった、楽しいアイデアもたくさん生まれました。これらは予想以上に時間を要し、詰め込み過ぎたことを後悔しそうにもなりましたが、今ふり返ってみると、「誰に」「何を」伝えたい展示なのかという、展示の「核」になる部分を共有していくための重要なプロセスでもあったように思います。



特別展の展示風景 (企画展示室)

3. “民俗博物館にしかできないこと”

前でもふれた通り、永井さんの作品はこれまでも天理市文化センターや福住公民館、県立図書館で展示されてきました。しかし、全作品（註）が一堂に会するのは今回が初めてということもあり、民俗博物館にしかできない展示を目指そうと考えました。

そこで、本展では、民俗博物館が所蔵する多種多様な資料の中から永井さんの作中に登場する生活用具や生産用具をピックアップし、絵の臨場感やぬくもりと実物資料の立体感が一体になるように工夫しました。

また、今回は、企画展示室だけでなく常設展「稲作」「茶業」「林業」・昔の暮らし関連展・コーナー展を含むほぼ全ての展示とリンクさせるという狙いがあったため、実物資料だけでも約 100 点を選定する必要がありました。この作業はかなりの時間と労力を要すると思われましたが、実際は「よりどりみどり」の状態で、かえってどのように組み合わせるかということに悩まされることになりました。もちろん、永井さんのスケッチが細やかで多岐にわたっているからこそのことなのですが、館蔵資料のバリエーションを再確認できました。また、過去に展示したことがある資料さえも、これまでに無かった展示の組み合わせと手法によって、全く異なる見え方や新しい活用の可能性につながられるということに気づきました。多角的な視点で資料を見る上でも、インターンの清水さんの役割は非常に大きかったと思います。

約 2 ヶ月の会期中には、展示の開会式や解説、小学校の団体見学、イベントやワークショップが多数計画されていました。特に 11 月 16 日（土）・17 日（日）の「秋まつり」（「関西文化の日」記念事業／文化庁後援事業「日本博」関連事業）は 16 のプログラムが集合する大型イベントで、帝塚山大学でも、特別展に関連したワークショッププログラム（昔の人になりきったコスチュー



秋まつりでのワークショップと展示解説の様子

ムでの展示解説、オリジナルデザインの折り紙を使った紙風船づくりなど）の企画・運営学生主体で担当してもらいました。併せて、永井さんの親族の皆様のご協力により、秋まつりの 2 日間限定でスケッチブック（原画）の公開も実現させることができました。

4. 新しい挑戦へ

秋まつりの日を最後にインターンシップの活動は終了しましたが、特別展がオープンしてから秋まつりまでの間、清水さんには他にもいろいろなプログラムを体験してもらいました。その内容は、園内の綿畑での草引きや土寄せに始まり、綿くり器・糸車を使った糸づくり、職場体験の中学生とのワークショッププログラムの体験、博物館実習の大学生との古民家での「かまど体験」の準備・運営など多岐にわたりました。



綿畑の草引き

これらは私たち学芸員が日常におこなっている仕事のほんの一部に過ぎませんが、そこには少しでも体験・体感することの楽しさを知り、博物館の仕事を好きになってもらいたいという想いがありました。一方で、私たち学芸員も、教えること・伝えることで教わることがあるということを知り、民俗博物館にしかできないことや学芸員としての役割や意義について熟考する濃厚な時間になりました。この経験は、これからの活動の糧にし、新しい挑戦へと繋げていきたいと思っています。

最後になりましたが、永井家・品川家の皆さま、高田照世教授をはじめ帝塚山大学の皆様、3 ヶ月間にわたって様々な面で民俗博物館を支えてくださった清水智子さんにこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

（註）「大正時代の世相」「提灯行列」「戦時下の世相」「戦後から昭和 60 年代の世相」を除く全 83 作品

〈展示紹介〉 シリーズ展 科学×道具
「昔のくらしのサイエンス」

溝辺悠介

令和元年 7月 20日(土) ~ 9月 8日(日) の期間で開催した「昔のくらしのサイエンス」では、明治時代に始まった化学教育・理科の教科書に着目し、教科書に書かれている内容から、当時の道具やくらしの様子を紹介しました。明治時代の理科教科書をもとみると、新しい学問である科学を教えるにあたり、身の回りの道具や現象を例に挙げて物理法則の解説を加えています。

本稿では、展示の中で取り上げた教科書『物理階梯』『究理問答』『小学校生徒用物理書』『物理学・女子理科』に焦点をあてその内容を紹介します。

(1) 『物理階梯』明治 5年

小学校教科書として出版されたもので、この本の普及により「物理」という名が定着しました。内容は西洋の科学入門書を訳したもので、物性、運動、重心、摩擦、圧力、流体、音響、温熱、光、色彩、電気、天体と多岐にわたる項目で構成されています。

(2) 『童蒙窮理問答』明治 6年

明治 5~ 6年の段階では「窮理」と名付けられた書物が出版されています。窮理という言葉は中国の朱子学からきており、物事の道理を窮め、そこに一貫する原理を発見することを意味しています。本書は挿絵を多用し物理現象を身近な道具・現象に置き換えて問答形式で説明しているのが特徴です。

(3) 『小学校生徒用物理書』明治 18年

明治 18年に出版された教科書で、当時の教科書がほとんど西洋科学本の翻訳であったのに対し、実験を主として自然法則を理解しようという意図のもと書かれた日本のオリジナル教科書として定評があります。構成はまず「実例」を挙げ、「試験」結果を述べて「定義」を説明し、最後に身の回りの現象「事実」を挙げて説明しています。

(4) 『物理学女子理科』明治 33年

『物理学・女子理科』は 10章からなり、第 1章から、運動・力、物体の性質、液体の性質、気体の性質、音の性質、熱、光、磁力、電気、物理学的変化と項目立てて記述があります。主に高等女学校、女子師範学校の教科書として編纂されました。

第 1章第 1に「物理学を学ぶ目的」という項目があります。そこには「婦人は家事を治むるを其の務とするも

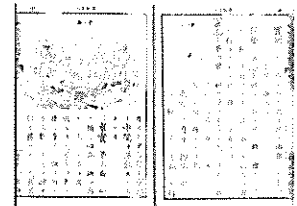
のなれば衣食住に付て其の理を明にするは必要の事なり」とあり、物理学を学ぶ目的が家事にとって必要性があることを説いています。

本書は各章で種類・法則を説明した後に事実及び応用の項目を設け、日常目にするであろう現象を紹介する構成となっています。例えば、沸騰の章では、事実及び応用として「飯を炊く釜に重き蓋を用い、食物を煮るが為に鍋の蓋を密にするは、圧力を大にして沸騰点を高らしんが為なり、物を煮るとき一旦沸騰を始むれば、多くの薪炭を焚きて火を盛んにするも無益にして、唯其沸騰を続けるに足る程の熱を用ふれば十分なり」とあります。羽釜の蓋が分厚く重く作られているのは、蒸気を逃がさないためと、釜内の圧力を高めて沸騰点を高めるためで、沸騰し始めたなら薪をくべて火力を強めても意味がないことを解説しています。

また、最終ページの「家事と物理学」の項では「家事は物理学に關係すること甚だ多き物なれば婦人は男子よりもこの学を学ぶの必要却って大なり」と述べられており、当時の「庖厨衛生は婦人の司るところ」という概念に則って表現していますが、家事の諸現象と物理学の關係性をうまく説明しています。

このように明治の理科教科書を読み進めてみると、当時国をあげて西洋化を進めるなかで、海外の先端であった科学教育を受け入れるため、家事に結び付けたことを興味深く感じます。そして当時の「身の回り」にはどんな道具があつて、どんなくらしをしていたかを垣間見ることが出来ます。

『小学校生徒用物理書』
力の合成挿絵
「振りつるべ」



【参考文献】

- ・片山淳吉編『物理階梯』1872年
- ・マリー・エ・スイフト著、鳥山啓訳『童蒙窮理問答初編』1873年
- ・後藤牧太、他『小学校生徒用物理書』1885年
- ・原田長松編『物理学：女子理科』1900年
- ・川本亨二「文明開化と科学教育の思想」『教育學雑誌(13)』1979年
- ・川本亨二「明治維新期の科学啓蒙と「学制」」『教育學雑誌(28)』1994年
- ・西條敏美「物理—その呼称の起源と成立」『サイエンスネット 第 8 号』2000 年
- ・小林昭三、他「日本各地の授業筆記が解き明かす明治中期科学教育とその現代的再構成」『日本理科教育学会北陸支部大会発表要旨集』2012 年

みんなく春夏秋冬

令和元年度の活動報告

【展示】

1. 企画展

- ・ 4月27日(土)～6月30日(日)
昔の暮らし関連展①「かわいい小物」
珊瑚やべっ甲をあしらった髪飾り、ガラスのランプ、ブリキの玩具、色とりどりの花々で飾られた器など、時を超えて伝わる“かわいい”ものをテーマに学芸員が厳選したデザインの小物が並ぶミニ展示。(3,417名)
- ・ 7月6日(土)～9月1日(日)
昔の暮らし関連展②「夏のくらしと涼む道具」
昔の夏のくらしにふれられる道具の展示。
(1) 夏とたたかう 陶枕、ワラ製の虫よけ、蚊やり豚、蚊帳
(2) 夏を楽しむ 団扇、かき氷機、氷がんな、竹製のかご
(1,438名)
- ・ 7月20日(土)～9月8日(日)
シリーズ展 科学×道具「昔のくらしのサイエンス」
明治時代の教科書を通して科学教育の始まりに触れながら、そこに書かれている道具や当時のくらしを紹介。(1,344名)
- ・ 9月14日(土)～12月1日(日)
昔の暮らし関連展③「あそぶ道具 たのしむ道具」
ブリキの玩具やけん玉、めんこ、紙風船といった、昔なつかしい玩具や遊び、幻灯機(スライド映写機の原型)や蓄音機なども展示。
展示室内には、ほおずきゴマや鳴りゴマなど様々な仕掛けゴマを実際にさわって遊べる体験コーナーも開設。(6,625名)
- ・ 9月21日(土)～12月1日(日)
秋季特別展「絵と道具でたどる昔の奈良のくらしー永井清繁氏のスケッチ帖からー」
天理市福住町の出身で、明治末期から昭和初期の

暮らしを数多く描いた永井清繁さんの作品を帝塚山大学共催のもと、一堂に展示。さらに当館が所蔵する資料の中から生活用具、生産用具をピックアップ。写実的でありながらも温もりのあるタッチの絵と実質資料が合わさることで、当時のくらしや人々の息づかいを間近に感じることのできる展示。(6,309名)

- ・ 12月14日(土)～2月2日(日)
昔の暮らし関連展④「冬のくらしとあたたまる道具」
冬に行われるわら編みの仕事と、あんかや懐炉などのあたたまる道具の移り変わりを紹介。(2,232名)
- ・ 12月21日(土)～2月2日(日)
冬季企画展「機(はた)ー麻・木綿・紬ー」
奈良県を代表する手織機「大和機」をはじめ、近江の天秤腰機、東日本の代表的伝統織物として知られる越後縮、結城紬の機を展示。相互を比較することを通じてそれぞれの特色を知り、繊維の性質の見極めや製品に対する指向など、生産性の向上(時間の短縮、労働力の軽減)という視点だけでは理解しえない日本の「ものづくり」の一端にふれる展示。(2,069名)

※季節展「ひなまつりー人形たちの宴ー」は本館耐震補強工事に伴い中止

2. コーナー展

展示室通路の一角を利用し常設展・企画展を補完する内容や季節に因んだテーマ、当館が現在取り組んでいる活動や新収蔵品について展示紹介します。

- ・ 3月16日(土)～4月21日(日)
「桶と籠」
用途によって大きさも材質も異なる様々な桶と籠を紹介。
- ・ 5月11日(土)～7月28日(日)
「民俗資料の保存修復」
民俗資料の保存・修復・活用について専門的に学ぶ京都造形芸術大学の学生が、民俗博物館が所蔵する資料に対して保存修復作業を行った。その取り組みをパネルと実物資料で紹介。



コーナー展「民俗資料の保存修復」

・ 8月3日(土)～9月1日(日)

「戦時下の暮らし」

毎年、「終戦の日」を迎える8月に、戦争と平和について考える恒例の展示。

今年は大和市中で女学校時代に戦時下の生活を体験した山中規矩子さんご所蔵の陶磁製アイロン、電気パン焼器などを展示し、期間中に当時使用された用具を使った体験とお話をうかがう関連催し(「作ってみよう調べてみよう戦時中のたべもの道具」)を実施。

3. 民家園の展示

・ 2月8日(土)～3月8日(日)

写真展「私がとらえた大和の民俗—つくる—」

共催：奈良民俗写真の会

写真家が、各自の視点で奈良の民俗行事・風景等を作品にし、広く公開する競作展。

9回目の本年は、新たな参加者を含む8名が参加。会場も民家園内、旧萩原家住宅(県指定有形文化財)、旧赤土家離座敷に移して開催した。

テーマは「つくる」。日々の営みのなかにある「つくる」、あるいはつくられたもの、つくための道具など、様々な観点から奈良の「つくる」を写し撮った作品計24点。「稲作」(浦聡)、「掛鯛」(川島朱実)、「秘密基地」(川畑秀樹)、「特別な箸」(志岐利恵子)、「カンピョウ」(田中真人)、「出雲人形」(的場啓)、「性(さが)」(森川光章)、「大和茶」(吉崎喜寿)

・ 2月15日(土)～3月8日(日)

「古民家でひなまつり」

大和民俗公園内に移築復原された江戸時代の町屋、旧白井家住宅(重要文化財)に、8段の雛人形を

展示。期間中は、かまどのぬくもりを感じながら部屋に上がってのんびりと早春のひとときを過ごしていただいたり、また、かわいい着物を羽織っておひな様の前で記念写真撮影などを楽しむことができるコーナーも。



古民家でひなまつり

※上記2催は新型コロナウイルス感染拡大防止のため2月27日(木)で終了

4. 玄関ホール展

博物館のエントランス空間を利用して、大和民俗公園の自然や公園内の民家等に関する紹介を行ったり、県内で様々な文化活動を行う市民や団体との連携を図る催しを実施。

・ 4月27日(土)～6月30日(日)

パネル展「古民家のある景色—旧萩原家かやぶき屋根ふき替え記念—」

・ 10月5日(土)～12月8日(日)

玄関ホール展「奈良の鹿のひみつ」

共催：一般財団法人奈良の鹿愛護会

奈良のシンボルともいえる奈良公園の鹿とその保護に取り組む一般財団法人奈良の鹿愛護会の活動について紹介。園内でのどんぐりツアーも開催。

【催し物】

1. 「国際博物館の日」記念プログラム

ICOM(アイコム/国際博物館会議)の提唱による「国際博物館の日」の趣旨に基づき、博物館が社会に果たす役割を探り、博物館に親しんでいただくための取り組み。今年のテーマは「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—」。講座とワークショップ各1催を実施。

- ・ 5月11日(土)
 - 「国際博物館の日」記念プログラム①
 - 「日本のすまいー古民家の保存修復と活用ー」
 - 【講師】 茅葺き職人 隅田茂氏
元関西大学教授 森隆男氏
 - 民俗公園内、旧萩原家住宅(県指定有形文化財)の屋根の総葺替え完成を記念し、同民家を会場に住文化の研究者と茅葺き職人によるトークセッション。文化財の修復・活用の事例、葺替えの舞台裏のエピソード、茅葺き職人の七つ道具の解説など。(20名)
- ・ 5月12日(日)
 - 「国際博物館の日」記念プログラム②
 - 「目指せ！修復技師ー民俗資料の修復体験ー」
 - 【講師】 京都造形芸術大学教授 伊達仁美氏
 - 民俗資料の保存・修復と活用の専門家を招き、木材の補修作業を体験。修復の工程を知るだけでなく、暮らしを支えてきた道具をより深く、身近に感じられるワークショップ。(12名)
- 2. 「関西文化の日」記念イベント(「日本博」関連事業)
 - ・ 11月16日(土)・17日(日)
 - みんなく秋まつり
 - 昨年までの「なら民博ふるさとフェスタ」に代わり、民俗博物館と民俗公園、古民家を会場に“モノづくり”と“体験”をテーマにしたイベントを開催し、秋を楽しむ16の多彩なプログラムを展開。また、高取町から移築復原された重要文化財の旧白井家住宅で「高取かかし祭り」とのコラボレーション展示を実施。
 - 【参加・協力】 カナタコナタ／紙芝居工房・^{あっぱれ}適／(株)川上材木店／コージーコットンクラブ(吉野学園)／澤田絹子氏／奈良の鹿愛護会／ひかり園／平城宮跡歴史公園／民芸寺子屋／むろうはちみつ／矢田の里たけのこクラブ
 - 【特別協力】 天の川実行委員会／帝塚山大学
(博物館入館者 893名)
- 3. ワークショップまつり
 - ・ 4月27日(土)～5月6日(月・祝)
 - こどもの日ワークショップまつり
 - ゴールデンウィークに、おとなと子ども共に楽しめるプログラムを展開。
- 【参加・協力】 紙芝居工房・^{あっぱれ}適／Good Job! センター香芝／たんぼの家アートセンター HANA／矢田の里たけのこクラブ(717名)
- ・ 2月15日(土)・16日(日)
 - 春の子どもワークショップまつり
 - 「古民家でひなまつり」展オープニングイベント。本年は、下記の参加協力のほか、写真展「私がとらえた大和の民俗ーつくるー」、旧前坊家住宅の屋根の葺替え現場見学会とリンクさせ、利用者層の拡大を図った。
 - 【参加・協力】 紙芝居工房・^{あっぱれ}適／平城宮跡歴史公園／むろうはちみつ／矢田の里たけのこクラブ／workspace(約450名)
- 4. 企画展関連・季節の催し
 - ・ 7月27日(土)
 - ミニ植木鉢の風鈴づくり&夏の暮らし体験(42名)
 - ・ 7月28日(日)
 - ミニガラス瓶の風鈴づくり&夏の暮らし体験
(35名)
 - ・ 8月3日(土)・4日(日)
 - 夏休み子ども工作教室&むかしの道具研究室
(255名)
 - ・ 8月11日(日)
 - 作ってみよう調べてみよう 戦時中のたべものと道具
【協力】 山中規矩子氏／(株)川上材木店(26名)
 - ・ 8月18日(日)
 - 集まれ！キッズ学芸員 タマネギの皮でハンカチを染めてみよう
【共催】 奈良工業高等専門学校(26名)
 - ・ 10月14日(月・祝)
 - 昔の暮らし体験①満月のお月見会&昔のあかり体験
(28名)
 - ・ 10月27日(日)
 - 昔の暮らし体験②秋のかまどごはん体験(18名)
 - ・ 12月14日(土)・15日(日)
 - 昔の暮らし体験③炭火アイロン体験&アイロンビーズでつくる季節かざり(71名)

- ・12月22日(日)
昔のくらし体験④古民家の大掃除&ミニほうきづくり(20名)
- ・1月4日(土)・5日(日)
新春!お正月あそび&昔ばなし上映会(194名)
- ・1月11日(土)・12日(日)
昔のくらし体験⑤映像でみる冬のくらし&七輪でもち焼き体験(95名)
- ・2月8日(土)
写真家座談会(30名)

※3月1日(日)早春おはなし会/梅まつり、3月22日(日)昔のくらし体験⑥春のかまどごはん体験は中止

5. 機織り実演 平成24年度より実施
機織りとその関連作業を見学できる。説明および機織りに関する様々な質問、相談も随時受付。
[協力] 澤田絹子氏 (本年度8回実施)

【指定文化財の保存修理特別公開】

- ・令和2年2月15日(土)、16日(日)
移築復原民家の屋根葺き替え工事 現場見学会
県指定有形文化財旧前坊家住宅(吉野町吉野山より移築復原)で実施中の杉皮屋根の葺き替え工事の作業現場を一般に公開。材料の杉皮製造工程のパネル展示や吉野建てを体感する内部見学も実施。
[協力] 一般財団法人京都伝統建築技術協会
谷上社寺工業株式会社

【連続講座】 平成28年度より実施

「大和機で麻布を織る」
期間：平成31年4月～令和2年2月(月2回)
指導：澤田絹子氏
江戸時代の奈良晒の原料、苧麻(カラムシ)の繊維を用い、当時と同タイプの紡績用具で幅25cm×長さ30cmの布織りを目指す。最長3年継続受講可能で、経緯手績糸による製織が目標。苧びき、苧績み、擦りかけなどの糸作り工程、大和機に糸をかけて織るまでを体験。機織りの基礎を学ぶため、腰機による講習も加えている。

【学校・博物館との連携・協力】

1. 大学等との連携(連携協力に関する協定締結)
 - (1) 帝塚山大学(平成23年度協定締結、継続)
人文科学研究科日本伝統文化専攻後期博士課程在籍者のインターンシップ受け入れ。令和元年度は1名(受入期間：8月28日～11月16日)
また、本年度は同校ブランディング事業とも連携し、秋季特別展及び関連催しを共同開催。
 - (2) 京都造形芸術大学(平成29年度協定締結、継続)
有形民俗資料の保存・継承、活用に関する教育研究活動についての相互協力。令和元年度は館蔵資料を修復の実習資料として貸出、修復作業成果を当館にてコーナー展示を実施。学生の卒業論文に関する資料提供、指導協力も行っている。
2. 博物館、図書館等との連携協力
教員向け地域資料研修会の開催
日時：8月7日(水)14時～17時
場所：奈良県立図書館
[共催] 奈良県図書館協会 地域資料研究会
奈良における綿栽培の歴史と、綿くり器と糸車を中心とした道具の使い方および学校の授業での活用方法の提案をおこなうワークショップ形式の研修会を実施。
3. 展示解説・出張授業等
 - (1) 団体見学の受入れ、展示解説
 - ・小中学校等の団体見学(72校)
 - ・高等学校(1校)
 - ・養護学校中学部・高等部(1校)
 - ・ろう学校(1校)
 - ・一般(6団体)
 - (2) 臨地講義・講師派遣
 - ・5月12日(日)臨地講義
奈良大学 通信教育部(79名)
 - ・5月26日(日)臨地講義
奈良大学(21名)
 - ・6月28日(金)臨地講義(16名)
天理大学文学部
 - ・11月5日(火)出張講義
法隆寺国際高校(溝辺、茶谷派遣)
 - ・11月30日(土)講師派遣
木津川市文化講座(横山派遣)

3. 博物館実習・インターンシップ、その他

※連携協定による受入れは別途記載。

- ・ 7月25日(木)・26日(金)
清翔中学校(2名) 職業体験
- ・ 10月22日～27日 ※24日は休講
大阪教育大学(1名) 博物館実習
- ・ 11月6日(水)～11月8日(金)
奈良市立富雄南中学校(2名) 職場体験学習
- ・ 11月21日(木) 矢田小学校町たんけん(11名)

4. 有形民俗資料、無形民俗資料記録資料の貸出

- ・ 丸行灯、靱すくい、千歯こきなど 計9点
〔教材〕京都造形芸術大学
- ・ 御田祭、水口祭、野神祭関係資料 計9点
〔展示〕橿原市立図書館
- ・ 映像資料「大和の民俗 生産生業Ⅰ」、「調査収集資料 月ヶ瀬の奈良晒」
〔研修〕月ヶ瀬奈良晒保存会
- ・ 戦時生活資料(国民服、防空頭巾ほか) 8点
〔教材〕大和郡山市立片桐西小学校
- ・ 糸車2点、綿くり器2点(体験用)
〔教材〕近畿大学附属小学校
- ・ 糸車(体験用)1点〔教材〕奈良学園小学校
- ・ 糸車(体験用)1点〔教材〕大和郡山市立矢田小学校
- ・ 氷冷蔵庫、電気冷蔵庫、電気炊飯器ほか 計7点
〔展示〕生駒ふるさとミュージアム
- ・ 「阪本踊り」、「篠原踊り」、「十津川流域の盆踊り」
など資料映像12点〔研究〕日本民俗芸能協会

5. 資料の特別閲覧・写真撮影、画像資料提供など

- ・ 『南都布さらし乃記』、奈良晒布(朱印部分)計3点
〔画像提供〕(株)CN インターボイス 記録映像「指先の記憶を学ぶ」(企画:奈良県教育委員会)制作
- ・ 産育関係資料(産着、襦袢ほか)一式
〔取材〕奈良新聞社
- ・ 展示室、収蔵庫内資料
〔特別閲覧〕大東市立歴史民俗資料館(研修)
- ・ 漢方関連資料〔特別閲覧〕奈良県産業・雇用振興部(調査)
- ・ 稲作作業工程写真、イラスト13点
〔展示〕一般財団法人山口町徳風会
- ・ 芋麻収穫作業及び芋ひき作業〔映像制作〕帝塚山大学
- ・ 「桶<オヒツ>」の構造図
〔展示・出版掲載〕京都府立山城郷土資料館
- ・ 「浅田松堂木造」写真〔出版掲載〕(株)童夢

- 『都道府県別日本地理・近畿』(ポプラ社)
- ・ 仕事着関係資料〔特別閲覧〕個人(研究)
- ・ 「唐臼ふみ」、「キンマひき」写真2点
〔出版掲載〕個人『南大野の歴史と文化』(私家版)
- ・ 大和緋関係資料13点〔特別閲覧〕個人(研究)
- ・ 「林文庫」(林宏氏のフィールドノートほか)
〔特別閲覧〕林先生を偲ぶ会(研修)
- ・ 展示室内資料〔特別閲覧〕個人(卒業論文作成)
- ・ 『南都布さらし乃記』〔出版掲載〕(株)MUESUM
『中川政七商店のものづくり ものざね』
- ・ 唐箕、千歯こき 2点〔出版掲載〕
(株)ユニフォトプレスインターナショナル『2020年版歴史資料集』(新学社)
- ・ 千石とおし、足ふみ脱穀機ほか10点〔出版掲載〕
(株)ナイス『ものの映りかわり 昔の道具』(国土社)
- ・ 展示室内、収蔵庫内資料
〔特別閲覧〕個人(卒業論文作成)
- ・ こき箸〔出版掲載〕(株)ナイス『2020年度標準
学力調査1学期+版中学校3学年』(東京書籍)
- ・ こき箸〔出版掲載〕(株)浜島書店『学び考える歴史』
- ・ 市松人形、ほか4点〔写真提供〕(株)もりや産業
資料保存に関する事例集
- ・ タルマル関係資料(重要有形民俗文化財「吉野林業用具
と林産加工用具」)〔出版掲載〕(株)丸善『民具学事典』
- ・ 踏車〔出版掲載〕(株)童夢『イネ・米・ごほん大百科』
(ポプラ社)
- ・ 「四季農耕図」絵馬(曾大根西宮神社蔵)
〔写真提供〕(株)NEXTEP 「池上彰の関西人が知らないKANSAI」(関西テレビ)内での放映
- ・ 「四季農耕図」絵馬(曾大根西宮神社蔵)
〔特別閲覧〕大和高田市教育委員会文化財保護審議委員
- ・ 氷冷蔵庫、電気冷蔵庫、電気炊飯器ほか計7点
〔出版掲載〕生駒ふるさとミュージアム 展示解説図録
- ・ 大和機、大和緋布
〔出版掲載〕個人 古希記念作品集『大和の紺掻き』
- ・ 犁、犁へら〔特別閲覧〕個人(調査)
- ・ 展示室内、収蔵庫内資料〔特別閲覧〕近畿民具学会
- ・ 千歯こき、馬鋏、箕など 計9点〔出版掲載〕
(株)童夢『イネ・米・ごほん大百科』(ポプラ社)

奈良県立民俗博物館だより Vol.45 No.1 (通巻111号)

2020(令和2)年3月19日発行

編集発行 奈良県立民俗博物館

〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地

Tel0743-53-3171 / Fax0743-53-3173

印刷 株式会社アイブリコム

〒636-0246 磯城郡田原本町千代360-1

Tel0744-34-3030 / Fax0744-34-3040